## モネ　それからの100年

**クロード・モネ（1840-1926）の絵画25点と、後世代の26作家による作品66点を一堂に展覧し、両者の時代を超えた結びつきを浮き彫りにする展覧会。**
**会期：2018年7月14日［土］～9月24日［月・休］**

**中高生プログラム2018**

### 美術を体験しよう!伝えよう![概要]

約6ヶ月間にわたる中高生対象の長期プログラム。
中高生が「モネ　それからの100年」展の作品を通して、様々な美術の見方や楽しみ方を体験し、8月に小学生対象のプログラム「美術をたのしむ!こども探検隊2018」を企画、実施した。
プログラム本編終了後、番外編として有志が本誌の編集にあたった。
日程：2018年6月17日（日）～11月4日（日）（本編8回＋番外編2回）
会場：横浜美術館8階、展示室｜対象：中学生、高校生｜参加人数：20名｜参加費：500円

**第1回｜はじめに** 6月17日（日）10:00～14:00［参加人数21名］
◉ スタッフ紹介、他己紹介　◉ プログラムの目的と概要説明
◉ 企画展「ヌード NUDE―英国テート・コレクションより」見学
◉ 対話による鑑賞　講師：岡崎大輔（京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター）

**第2回｜モネを知る** 7月8日（日）10:00～14:00［参加人数20名］
◉ モネの作品と人について　講師：深谷克典（名古屋市美術館副館長）
◉ 準備中の展示室の見学　講師：松永真太郎（横浜美術館主任学芸員）

**第3回｜展覧会をみる、アーティストと出会う❶** 7月29日（日）10:00～14:00［参加人数16名］
◉ 企画展「モネ　それからの100年」見学（モネの作品を中心に）
◉ グループディスカッション「モネについて小学生にどんなことを伝えよう」
◉ アーティストと出会う① 講師：小野耕石（出品作家）

**第4回｜展覧会をみる、アーティストと出会う❷** 8月5日（日）10:00～14:00［参加人数19名］
◉ 企画展「モネ　それからの100年」見学（近現代の作品を中心に）
◉ アーティストと出会う② 講師：松本陽子（出品作家）
◉ 「モネ　それからの100年」展の近現代作家について

**第5回｜「美術をたのしむ!こども探検隊2018」の企画❶** 8月12日（日）10:00～14:00［参加人数16名］
◉ グループワーク 小学生のためのプログラム検討

**第6回｜「美術をたのしむ!こども探検隊2018」の企画❷** 8月19日（日）10:00～14:00［参加人数15名］
◉ グループワーク 小学生のためのプログラム準備

**第7回｜美術をたのしむ!こども探検隊2018** 8月22日（水）9:30～14:30［参加人数17名］
◉ 小学生のためのプログラム実施

**第8回｜まとめ** 9月9日（日）10:00～12:00［参加人数13名］
◉ プログラムの振り返り ◉ プログラムを通しての発見をかたちにする

**番外編1｜記録誌をつくる❶** 10月28日（日）10:00～11:30［参加人数8名］
◉ 記録誌の編集、デザイン方針の検討 ◉ タイトルの決定

**番外編2｜記録誌をつくる❷** 11月4日（日）10:00～11:30［参加人数11名］
◉ デザインとは？ 講師：森上暁（NDCグラフィックス デザイナー）
◉ 記録誌案のプレゼンテーション

### 美術をたのしむ!こども探検隊2018［概要］

「モネ　それからの100年」展を楽しむために中高生が小学生を対象に企画したプログラム。
中高生がガイドとなり、4チームに分かれて展示ツアーとワークショップをおこなった。
日時：2018年8月22日（水）10:00～14:00｜会場：横浜美術館8階、展示室
対象：小学4～6年生｜参加人数：24名｜参加費：無料

# 自分の庭からひろがる世界

横浜美術館中高生プログラム2018［記録誌］

## 発行にあたって

5回目の中高生プログラムとなる今年度は、企画展「モネ　それからの100年」を取り上げた。およそ半年にわたる長期であること、小学生のための展示ツアーとワークショップを「美術をたのしむ!子ども探検隊」として中高生自身が企画・実施することがこのプログラムの特徴である。具体的な実施内容は本記録誌にまとめられている。

じつは毎年のように、私たちスタッフの耳が引き寄せられる中高生の発言がある。元気があふれているようにみえる中高生たちのもうひとつの面だ。こちらからの問いかけへの反応であったり、誰に言うとでもないボソッとした呟やきであったり、ごくまれに涙とともに語られる言葉もある。そうした時、いつもは笑顔で、まっすぐな眼差しの中高生たちの、日ごろ背負っている荷の重さを感じることがある。私たちスタッフは家族や教員とは異なるおとなとして接し、プログラム終了の頃には中高生は私たちとの交流にも慣れて、スタッフとの距離が縮まっている。そうした中で耳にすることが多い。もちろん、そこから解き放ってあげたり、解決したりすることはできない。ただ、家庭でもない、学校でもない、横浜美術館で行われる本プログラムが、日頃のしがらみから離れ、自分自身を素直に表すことのできる「もうひとつの場所（サードプレイス）」でありますように、と密かに願う。

本プログラムには毎回アーティストや専門家が登場する。今回の二人のアーティスト、松本陽子さんと、小野耕石さんはとりわけ印象が強かったようだ。松本さんは82歳。当館に展示された作品について、毎日1枚仕上げる作品を数十年描いていた、という話の後、質問の時間となった。ひとりが「今まで描いた中で気に入っている作品はありますか」と尋ね、松本さんが「そうね、5枚くらいある」とさらりと答えた。膨大な作品群の中で、気に入っている作品はごくわずかであった。それは中高生の振り返りで「かっこいい」とコメントされた。小野さんからは絵を描き始めた頃、蛾や蛾の燐粉に触発されたという話があった。小さな作品を持参し、触れさせてくれた。自然と小野さんの周りに中高生が集まり、興味津々といった面持ちで話を聞いた。そして、「モネ　それからの100年」展の展示準備中に松永学芸員が展示室を巡りながら話をしてくれた。説明の途中で、突如「壁の色が計画と違う!」と叫んだ。白く塗られているはずの壁が青く塗られていると気づいた驚愕の瞬間に、みんなで立ち会ってしまった。開幕後の展示室で中高生たちが、「壁が白くなっていた」と口々に話していた。直ちに起こった問題に対処しなくては、という切迫した様子の学芸員。このように、中高生と真摯に向き合うアーティストの話や作品、専門家のリアルな姿が中高生たちには響く。

中高生の時代にも、さらにその先へと続く道のりでもさまざまな事が起こるだろう。そうした時に、美術と美術館はいつも傍にあると感じていてくれたら、と願う。

横浜美術館 教育普及グループ チームリーダー
主任エデュケーター｜主任学芸員
端山聡子

# 6/17日

## 第1回 はじめに

中高生もスタッフも緊張しながら迎えたプログラム初回。
まずは二人一組になってお互いを紹介し合う他己紹介からスタート。
メンバーをよく知ることが目的だったが、
みんな発表することにドキドキして他の人の話があまり頭に入らなかった様子。
企画展「ヌード NUDE」の鑑賞では、全体の雰囲気をつかむ見方を意識した。
チーム対抗戦のモネのパズルで白熱した後は、
モニターに映し出したモネの《睡蓮》にじっくり向き合い、
対話型鑑賞のファシリテーターである岡崎大輔さんの進行のもと、
気づいたことをそれぞれの言葉で話し合った。

◉ 最初はシーンという感じ。
◉ 展示室では作品より展示の工夫を見た。
◉ パズルに熱中した。

企画展「ヌード NUDE ―英国テート・コレクションより」見学

美術館のちがう楽を発見！

岡崎大輔さんのファシリテーションで《睡蓮》をじっくりみる

クロード・モネ《睡蓮》のパズルに熱中

# 7/8日

## 第2回 モネを知る

「モネ　それからの100年」展の企画者の一人である
深谷克典さんをお迎えして、モネについてのレクチャーと
質疑応答をおこなった。率直で本質を突いた中高生の質問に、
深谷さんがどう答えようか頭を悩ます場面も。
午後は展覧会を担当する松永学芸員の案内で準備中の
展示室の見学へ出発。まだ作品が展示される前の
からっぽの空間で、レイアウトや壁の色、質感へのこだわりを
聞きながら、どんな展覧会になるのかを想像した。

松永学芸員が準備中の展示室を案内

モネの展覧会を
4回企画しても飽きない。
奥が深く幅が広い、
存在の大きな
画家だからだと思う。

モネ展の企画者である深谷克典さんのお話

◉ モネと浮世絵との比較が具体的でよかった。
比較は初めてで、面白くなった。
◉ モネがその時代や周りに流されないのが印象的。
戦争中でも描き続ける精神はすごい。
◉ 当時は気に留められなかった作品が後から認められて
影響力を持ったことに驚嘆した。
◉ 壁の色事件！指定と違うことに学芸員さんがツアー中に気づく。
後からちゃんと直っていた。
◉ クレートの中に作品が入っているところを見て、
シールに「モネ」と書いてあって興奮・感動した。

モネの作品に向き合う

記録誌タイトルは中高生の提案による

## あとがき

中高生と一緒の時間を過ごしていると、自分が同じ年代だった頃を思い出す。いつも不安と不満を抱えて、自分が何者でもないことにもどかしさを感じていた。しかしそれは言い換えれば何でもできる可能性を秘めていたということ。そんなふうに大人たちから無責任に言われることにも反発を感じていたかもしれない。気がついたらそんな年頃をするっと抜けてしまっていたが、渦中にいるときは息苦しかった。

中高生プログラムの準備中、アーティストや専門家に講師を依頼すると、よい返事を得られない場合がある。それは中高生が子どものように素直ではなく、大人のように成熟していない「扱いにくい」年代だと思われてしまうからだろう。しかし表情にはあまり出さないが、彼らは心の中でたくさんのことを思い、考え、本当は純粋さと大人を凌ぐ理解力を併せ持っている。これほどまでに他者の言動や感情に敏感で、全てを吸収していく年代は他にないだろう。彼らは驚くべき瞬発力と思考力で大人の投げかけに答えてくれる。そのことを知るアーティストや専門家が講師を引き受けてくださった。試行錯誤を続けながら表現や仕事を続ける大人たちの言葉は、中高生にどのように響いただろうか。

今年のプログラムが始まった頃、中高生はとても緊張していた。お昼休みは静まり返り、一人でスマートフォンを眺める参加者もちらほら。それが回を重ねるごとに徐々に打ち解けていき、「こども探検隊」で小学生を迎える頃には積極的に子どもたちに声をかける自発性と責任感を発揮していた。この記録誌からもそんな彼らの表情や気持ちの変化を読み取ることができるだろう。中高生を温かく見守ってくれたのは5名のボランティアだ。距離を置きすぎず、過干渉にもならないように接してほしいという美術館側の難しい意向を汲み取り、中高生が安心して過ごせる雰囲気をつくってくれた。

思春期は不安定でもろい。身体と心が連動するように、大人に移ろう過程で揺れ動いている。その悩んだり苦しんだりする過程には、実は飛躍の種が隠されている。それは大人になっても消えはしないが、漠とした大きな悩みを抱えることができるのは若さの特権ではないだろうか。そんな時期だからこそ、中高生には美術に出会ってほしい。自らの表現を貫くアーティストに出会ってほしい。美術は世界の多様性を示し、様々な解釈をできる寛容性を持っている。多感な時期に美術を通してたくさんの考えや生き方に触れることが、彼らの世界をひろげてくれるだろう。

横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト
森 未祈

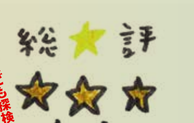
## 9/9(日) 第8回 まとめ

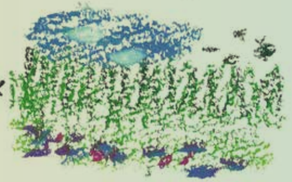
「こども探検隊」での各チームの活動をみんなで共有した。その後、プログラム全体を通してどのような体験や発見ができたかを発表した。その発見や感じたことを約30×30cmの台紙の上に立体的なかたちで表すことにも挑戦した。中高生は迷うことなく手を動かし、あっという間に作品が完成した。それらの作品をこの記録誌の表紙に用いている。集合写真を撮り、笑顔でプログラム本編を締めくくった。

プログラムを通しての発見をかたちで表す

プログラムの振り返り

- チームで「こども探検隊」の企画を話し合っていると パッとアイディアが浮かぶことがあり、内容が充実していった。
- 「こども探検隊」では、作品を心で見るという 分かりにくいことを小学生に伝えられた。
- 松本さんが話してくれたことが印象的。 「自分の好きなことを伸ばしたり、興味がないことでも挑戦してみたりすることが自分の成長につながる」




## 10/28(日)・11/4(日) 番外編 記録誌をつくる

10月、有志のメンバーが集まり、この記録誌の作成に向けての編集会議をおこなった。掲載したい内容やデザインのイメージがどんどん膨らむ一方で、タイトルがなかなか決まらず、話し合いが長引いた。予定時間をオーバーして生み出したタイトルは「自分の庭からひろがる世界」。11月、デザイン会社「NDCグラフィックス」を訪れた。中高生は、プロのデザイナーを相手に動じることなく、記録紙のイメージをプレゼンテーションした。

- 冊子というより、中高生プログラム自体が一つの作品になるようなイメージ。
- 読む人にも見てわかるものにしたい。読んで追体験ができるような、体験型の冊子。

記録誌の編集、デザイン方針を検討する

デザイナーの森上さんへ向けて記録誌案のプレゼンテーション

「モネ それからの100年」展が開幕し、これまで学んできたモネの実際の作品に初めて対面。大混雑している会場を通り抜けるのに苦労しながらも作品をじっくり鑑賞して、モネの人物像や作品の特徴についてディスカッションした。
その後、出品作家の一人である小野耕石さんにお話を伺った。
自身の表現の原点にあるものや哲学を熱く語る小野さんの周りには自然と輪ができ、みんなに笑顔が広がった。

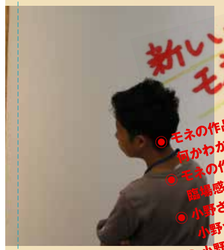
**表現というのは、他人とは共有できないもの。それが積み重なって衝動になると表現が生まれる。ダンスでも、文章でも、作品でも。**

出品作家の小野耕石さんのお話

小野さんの作品のかけら

# 7/29(日)

## 第3回　アーティストと出会う ❶ 小野耕石さん



新しいモネを発見！

- モネの作品はザザッと描いているように見えるけど、本当は繊細？離れてみると何かわかってリアルですごい。景色が想像できる。ギャップが面白い。
- モネの作品を見るとその場にいるような気持ちになる。臨場感。人のいない自然が、どこまでも続いているような広がりがある。
- 小野さんの作品は人によって見え方の違いがはっきり出る作品。小野さんのイメージが見る人が持つイメージとなり、どんどん広がってゆく。
- 小野さんは「モネを意識していない」と言うけど、実際似ている。モチーフが自然的。
- 作品の小さなかけらで遊んだ。スペシャルな体験だった。

「モネ それからの100年」展を見学

# 8/5(日)

## 第4回　アーティストと出会う ❷ 松本陽子さん

出品作家で画家の松本陽子さんをお招きしてお話を伺った。
松本さんの気迫に満ちたお話しぶりに中高生は少し緊張気味だったが、その思いを受け取るように、世代を超えた真剣な対話になった。
午後は「モネ　それからの100年」展に出品されている近現代の作品を振り返った後、4チームに分かれて、小学生を対象に開催する展示ツアーの検討を始めた。
いよいよ「こども探検隊」に向けた準備のスタートだ。

**たくさん描いてきたけれど、自分の絵で本当に気に入っているのは5つくらい。**

出品作家の松本陽子さんのお話

- かっこいい人。
- 「自分だけのピンク」という言葉が印象的。
- 自分の好きな作品が5つくらいしかないなんて、あまり満足していない？それもまたかっこいい。
- 松本さんの作品は何かを表していそうだけど、何かはわからない。喜びでも悲しみでもない感情？モノじゃなく、何かの考えや気持ちを表している？

中高生は自分たちが小学生だった頃のことを思い出しながら、小学生のための展示ツアーとワークショップの計画を練った。
思うように話し合いが進まなかったり、具体的な案に落とし込むことに時間がかかったり、様々な試行錯誤を経て、各チームが徐々に結束していった。
チーム名、プログラム名、当日の役割分担を決め、必要な道具や材料のリストアップ、リハーサルまでを全チームがなんとか終えることができた。

# 8/12(日)19(日)

## 第5回｜第6回　「美術をたのしむ！こども探検隊2018」の企画

- 小学生のために難しい言葉は使わないようにしよう。
- 小学生は固定観念が少ないから、自由に想像して、感じて、見てもらいたい。
- 松本さんも、絵を見るときは感じることが大切と言っていた。
- 二つのものを色々な視点で見る。モネと現代を比べたり、自分の気持ちを人の気持ちと比べたり、形がないもの・わけがわからないものを描いて見たり。

グループワーク　小学生のためのプログラム検討、準備

グループワーク　展示ツアーの検討

グループワーク　作品の紹介のしかたを考える

グループワーク　展示ツアーのためのリハーサル

**中高生プログラム参加者**
青木桜来（中学2年）｜伊藤詩太（中学2年）
岩竹まえ（中学1年）｜大井花歩（高校1年）
木下結菜（中学1年）｜黒河みなと（中学3年）
仙波百桃子（高校2年）｜寺田洸揮（中学2年）
東谷慶太（中学1年）｜費 和音（中学2年）
福田日向子（高校2年）｜細谷はる華（中学1年）
堀越まりあ（高校1年）｜松尾凛音（高校1年）
御江風香（中学2年）｜南枝里奈（中学1年）
森 菜々美（中学1年）｜森 アルコ（高校2年）
安田芽以（中学1年）｜柳原英紀（中学3年）

**スタッフ**
教育普及グループ長 山﨑 優
教育普及グループ主席エデュケーター 関 淳一
教育プロジェクトチームリーダー 端山聡子
教育プロジェクト
森 未祈｜太田雅子｜六島芳朗｜石塚美和

**ボランティア**
稲垣ひとみ｜北川裕介｜城所美千恵
中里友紀｜山﨑奈々子


**自分の庭からひろがる世界**
**中高生プログラム2018**
**美術を体験しよう！伝えよう！「記録誌」**

**発行**
横浜美術館
教育普及グループ 教育プロジェクト
220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1

**発行日**
2019年3月

**編集**
プログラム参加の中高生有志
横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト

**デザイン**
NDCグラフィックス

**撮影**
加藤 健（＊マークのついた写真）

**印刷**
山陽印刷株式会社

# 8/22（水）

## 第7回　美術をたのしむ！こども探検隊2018

### 小学生のためのプログラム実施

いよいよ「こども探検隊」本番。小学生が集まり、
中高生が企画した展示ツアーとワークショップを
一日で体験する。中高生は、小学生を迎え、
終了後迎えに来た保護者のもとに送り届けるまでの
全ての運営を自分たちで担う。
プログラムが始まると、計画通りにうまく進むことも
つまずくこともあったが、
中高生は強い責任感をもってやり遂げた。
小学生はお兄さんお姉さんとの
交流を楽しみ、終始笑顔に溢れていた。

### みんなでつくろう！モネの庭！！

**◎Aチーム── Water Lilies**

メンバー：費 和音｜福田日向子｜堀越まりあ｜南枝里奈｜柳原英紀
小学生参加者：7名
なかなかメンバーが揃わず話し合いに苦労したチームだったが、役割をうまく分担して当日を迎えた。モネの筆触と、年代による表現の違いに着目した展示ツアーをおこなった。準備の段階で中高生があらかじめ大きな池や橋をつくっておき、当日は小学生と一緒につくった睡蓮の花や葉を浮かべる共同での作品づくりをおこなった。

◉モネの作品である睡蓮に結びつけて制作した。
◉昼の時間をたっぷりとれたのでモネの世界観が広がった。（中高生）
◉モネはセンスが良いと思った。（小学生）
◉打ち解けることができてよかった。（中高生）
モネみたいな絵が描きたい。（小学生）

### 作品を「感じて」観る旅に出発！

**◎Bチーム── 刑事五人と探偵団**

メンバー：大井花歩｜木下結菜｜仙波百桃子｜東谷慶太｜森 菜々美
小学生参加者：5名
静かに活動をスタートし、前半は緊張感に満ちていたが、しだいに
打ち解けていった。順路とは逆に会場をめぐる独創的な展示ツアーで、
抽象絵画を中心とした作品にじっくりと向き合った。気に入った作品から
受けた印象を箱や瓶の中に表現するワークショップをおこない、
完成した作品を展示して意見を交わし合った。

『刑事五人と探偵団』いざ出陣！

◉ワークショップの後にミニ展覧会を
やったのがよかった。（中高生）
◉展示ツアーの時、あまり会話が弾まなかった。
もっと話を引き出してあげられたらな、と反省。（中高生）
◉展示室で作品をみるのも楽しかったし、
つくるのも楽しかった。（小学生）

### オリジナルの庭を作ろう！！

**◎Cチーム── 箱庭**

メンバー：青木桜来｜黒河みなと｜寺田洸揮
細谷はる華｜森 アルコ
小学生参加者：6名
元気いっぱいの小学生が揃い、絵の伝言ゲームから
賑やかに活動をスタートした。展示室に入る前に
少人数のグループに分かれ、それぞれのペースで
興味に応じて展覧会を鑑賞した。お気に入りの作品を
みつけ、中高生お手製のワークシートに特徴を
書き出した。その作品の特徴を反映させた
小さな自分の庭をつくり、箱に納めた。

◉活発な小学生が多く、かたくない雰囲気でできた。（中高生）
◉当日のプラン変更で、グループをさらに分けて鑑賞した。
もっとしっかり作品について伝えられたらよかった。（中高生）
◉作品のすごさがわかった。
美術館が難しくなくなった。（小学生）

◉ワークショップで、小学生が中学生のマネをせずに
自分の考えを表現してくれた。（中高生）
◉作品を小学生に教えるために学ぶことで、自分たちも
モネへの興味が一層強くなった。（中高生）
◉展示ツアーで知れたことを作品づくりで
自分なりに生かせて楽しかった。（小学生）

### モネから学ぶ実像と虚像

**◎Dチーム── 庭師**

メンバー：伊藤詩太｜岩竹まえ｜御江風香｜安田芽以
小学生参加者：6名
4チームの中で唯一中学生だけで構成されたグループ。
年齢が近いこともあり、小学生と親密な雰囲気で
プログラムを進行した。中高生は念入りな作品解説の準備をして、
展示ツアーにたっぷりと時間をかけた。「実像と虚像」を
テーマにしたワークショップでは、ボードに鏡面シートを貼って
池の水面に見立て、周囲の映りこみを活かす作品を制作した。

《発明》「モネから考える実像と虚像」